

研 究 報 告

令和 8 年 4 月 14 日

公益財団法人 前田記念工学振興財団

理 事 長 岸 利 治 殿

研究代表者

所 属 : 久留米工業大学 建築・設備工学科

氏 名 : 大森洋子

研究課題名 : 大正末期の直営工事による町家の建築生産方式と材料の流通に関する研究

助成金額 : 100 万円

研究実施期間 : 自 令和 7 年 4 月 1 日 ～ 至 令和 8 年 3 月 3 1 日

大正末期の直営工事による町家の建築生産方式と材料の流通に関する研究

A Study on the Building Production System and Material Distribution of Machiya Houses Built under Direct Management in the Late Taisho Period

久留米工業大学 建築・設備工学科 教授 大森洋子

（研究計画ないし研究手法の概略）

現在は木造住宅や小規模店舗の建設であっても、施工は建設会社やハウスメーカーに一括発注することが一般的であるが、戦前までは材料の調達や職人の手配を施主自ら行う直営方式も木造建築では普通に行われていた。その際に施主は購入した材料と金額、職人へ支払った賃金を記録する「普請帳」を作成していた。福岡県直方市殿町に存在する登録文化財である昭和 2 年建設の旧前田園は大型の木造商家で、「新築帳」と書かれた普請帳が残り、棟上げまでが記録がされている。この「新築帳」を基に当時の木造住宅の生産方式と材料の流通範囲、および新築に関する相互扶助的な地域社会の関わりを明らかにすることが研究の目的である。研究は以下の方法で行った。

①旧前田園の建物の特徴と使用されている材料の把握

旧前田園は主屋、釜屋、離れ、奥座敷、倉庫があるが最初に建設されたのは主屋(延床 211 m²)、離れ(延床 57 m²)、釜屋(延床 34 m²)である。離れと釜屋は内部仕上げが大きく改変されており、当時の仕上げ材料を確認することができないため、使用材料の調査対象は内部が真壁仕上げである主屋とした。主屋の実測調査と痕跡調査を行い復原図を作成すると共に、使用されている材料の調査を実施した。

②新築帳の分析

新築帳は 86 ページあり「材木」「大工」「左官」「金物竹縄」「日役」「お茶上り」「雑費」の項目に分けられており、項目ごとに材料や支払金額を整理すると共に材料の調達地を分析した。また棟上げ時の相互扶助の様子も考察した。

（実験調査によって得られた新しい知見）

1. 旧前田園の履歴と建物の特徴

（1）旧前田園の履歴

旧前田園主屋の棟木の墨書には、昭和 2 年 4 月吉日上棟、施主前田長吉 59 歳、棟梁 福岡市 新藤卯三郎 32 歳と書かれている。前田長吉は博多（現在の福岡市博多区）の川端町で雑穀商を営んでいたが、明治 34 年（1901）に直方の多賀町へ移住し借家にて前田園という屋号で茶舗を創業し、八女茶や香料を主に炭鉱購買部へ卸したという。昭和 2 年に建物を現在地に新築して移り住んだ。その後販路を山陰や北海道へ拡げ、茶卸販売業を営んでいた。平成の終わりまで子孫の前田徳子氏により営業されていたが、死去に伴い敷地や建物が売りに出され、2021 年に現所有者の塩川氏が購入し翌年カフェとして開業した。

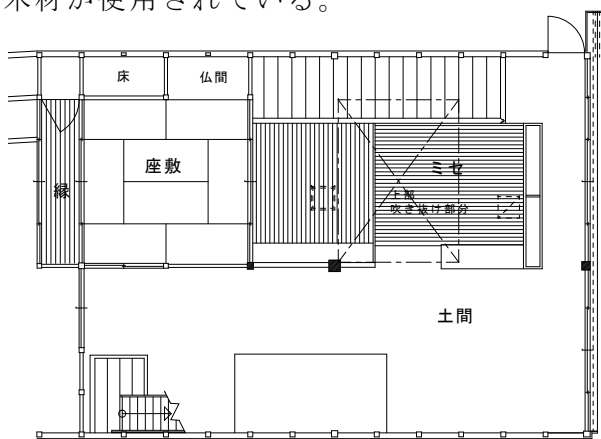
（2）旧前田園本店の主屋の特徴

主屋外観は正面 1 階の建具がアルミサッシュとシャッターに変えられている以外は当初のままで立派である。主屋は間口 4 間半の切妻平入り総 2 階建てで、梁間は 6 間と大型で階高も高く、全体の高さは 11m を超える。屋根は石州瓦の棧瓦葺きで地元では赤瓦と呼ばれて

いる。外壁は大壁造で鼠漆喰仕上げであるが、角柱のみ真壁造である。正面1階は欄間付きの全面開口で開放的な造りである。

1階平面は図1のように復原できる。正面左手に土間を通し、右手には低い板張りの店の間を配し、その奥には床の間付き8畳の座敷がある。床の間は畳床で床柱はスギ絞り丸太、床框はケヤキである。壁はジュラク塗、天井は竿縁天井で、天井高は3,064mmと高い。座敷に続く半間の縁は、床はスギの縁甲板張、壁は白漆喰塗、天井は垂木露しで屋久杉風の野地板を張っている。店の間の中央に2間×1間半の吹き抜けがあり、2階の物置へ荷物の搬入を行っていた(図2参照)。土間の奥隅にケヤキの階段がある。2階平面は前面に563～839mmの幅広のマツ板張りの物置、奥に床の間付きの8畳の座敷と続きの6畳の間を配し、中庭側に縁側を設ける。6畳の間には1間幅の押し入れが付く。押し入れの板戸はケヤキの鏡板で上質である。縁の床も幅広のマツ板張、壁は白漆喰塗、天井はスギ野地板の化粧垂木露しで、雨戸の外に手摺りが着く。

基礎は御影石切石の布基礎で土台が回っている。外壁周りの柱はスギで115mm角～165mm角、大黒柱はケヤキで267×251mmと大きい。他に2本のケヤキの柱がある。上がり框もケヤキが用いられている。梁はマツで、表に面する胴差は成が650mmもある。土間の大引き天井の高さは約4,100mmと高い。小屋組は3段の梁束で構成される和小屋で、小屋束はスギの押角材、母屋はスギ丸太、垂木はスギの太鼓材が使用されている。全体に上質で樹齢の高い木材が使用されている。



黒塗りの柱はケヤキ
図1 主屋1階復原平面図

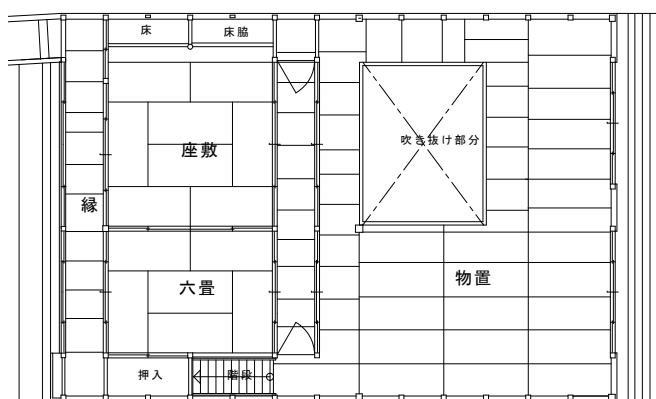


図2 主屋2階復原平面図

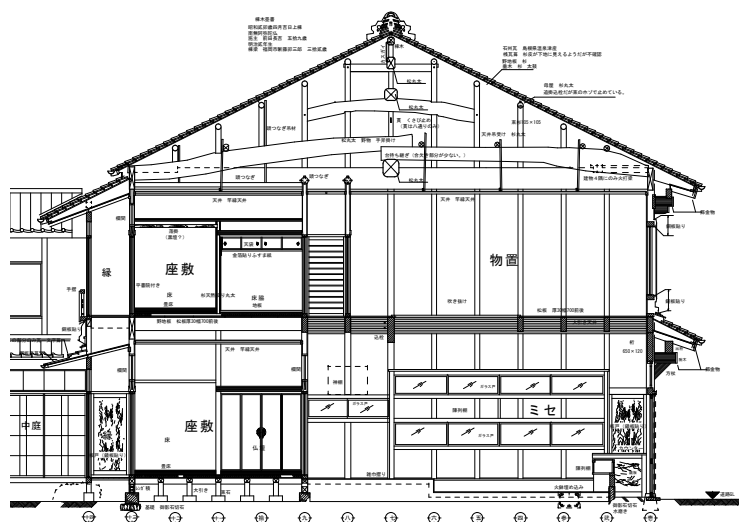


図3 主屋復原矩計図



写真1 主屋正面

2. 新築帳の分析

(1) 材木の調達

木材の調達先は一ヶ所ではなく複数の材木業者から購入している。また、立ち木を直接購入もしている。大正15年10月2日に遠賀郡香月村（現北九州市八幡西区香月）の業者から樺3本を262.32円で購入したことが最初である。購入した樺は製材に出され、大黒柱や階段、床柱に加工されている。その後、宗像郡池野村に生えている松の立木4本を600.5円で購入する契約が結ばれている。その他にも、赤松5本11m³、黒松12本48m³、樫4本1m³を購入している。梁や幅広の床板に加工されている。調達先は直方が当時属していた鞍手郡の材木店からも購入してはいるが、北隣の遠賀郡の材木店から多くを購入している。材木調達を依頼した世話人が遠賀郡香月村に住んでいたためと考えられる。宗像郡や南隣の穂波郡の国有林からも立ち木を購入している。材木代は総額9,494.12円となっている。物価ベースで換算すると当時の1円は現在の4,000円程度であり、材木代は現在の37,976,480円となる（表1参照）。

(2) 瓦の調達

瓦は当時瓦の製造が盛んであった島根県温泉津町の中島弘之から購入している。前田長吉は山陰地方にも販路を広げており、その縁があったのことだと考えられる。赤瓦上平1,000枚120円、赤瓦上二割1,000枚80円の計200円であったことが記載されている。中島が昭和2年3月20日に発送し4月8日に瓦3,100枚が到着している。

表1 材木購入先

旧郡名	氏名	所在地
直方市	藤田勝材木	直方市頓野
旧鞍手郡	吉田材木店	宮若市福丸
旧遠賀郡	世話人 細田留吉	北九州市八幡西区 旧香月村
	林蕃太郎 (製材)	北九州市八幡西区 旧香月村
	平田製材所	北九州市八幡西区 旧香月村
	石田材木店	遠賀郡岡垣町
	白水屋材木	遠賀郡岡垣町
	松の立木	遠賀郡岡垣町
旧宗像郡	池野村神社 掌の立木	旧池野村
	大松2本	旧宗像郡
旧穂波郡	国有林	飯塚市相田
旧企救郡	篠原安太郎 材木	北九州市小倉南区 旧城野村
福岡市博多	小谷商店材 木	福岡市博多区

表2 購入した材木の種類

材料	寸法
ケヤキ	樺 3本
	3間 尺1寸5分、 尺3寸
	3間 尺1寸、 尺2寸
	1間 尺6寸、 尺6寸
	ケヤキ材及びトチ材料 巾3尺2寸以下6千枚
マツ	赤松 5本 材積11立方米
	黒松 12本 48立方米
	立木 松 4本
	1寸タルキ2本
	大松2本
スギ	松梁
	松板
	末口4寸1丈2尺 50本
	末口3.5寸 1丈100本
	文割 2本
	1丈4寸中角2本
	柱 正4寸5分角 24尺
	柱 正6寸角 24尺
	6尺5寸正8分板 28.75坪
	2間 3寸口 ニツ割 85本
	2間 押 4×5角 18本
	8分板 ハネ物 3坪3勺
	24尺 上4×5角 1本
	10尺 100本
	12尺 50本
	丸太14尺 末口5寸5部 30本
	成木
	板1枚
カシ	カシ 4本 1立方米
モミ	板1坪

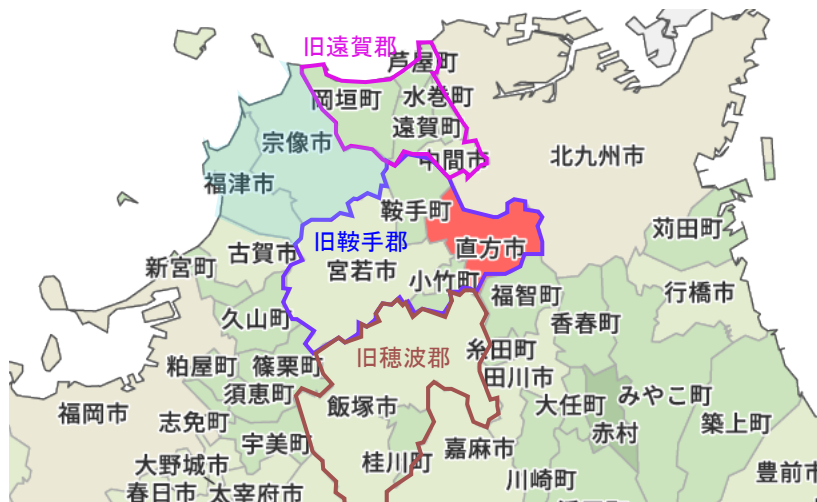


図4 直方市と材木購入先の位置
(Map-Itよりダウンロードした地図を筆者加工)

昭和5年5月1日に温泉津町自治協会が発行している「温泉津案内」に瓦陶器製造元として中島弘之氏が紹介されている。現在も温泉津伝統的建造物群保存地区の港に近い場所に中島家の建物が残っている。温泉津町では昭和初期には鉄道輸送が盛んになってはいるものの、まだ帆前船・機帆船が活躍し北九州への回航も行っていたことから、海上輸送で瓦が運ばれと考えられる。石炭の積出港であった北九州市の若松港と直方は鉄道で結ばれており、若松港で荷揚げされた瓦は鉄道で直方へ運ばれた。

(3) その他の材料

金属や石材、煉瓦、竹、縄などは市内の店や個人から調達している。金属はトタン板や釘が多く、1,369.82円と高額になっている。石材は材工共の値段で60.58円と記されており、基礎石として使用されている。雑費としては土、グリ、砂、煉瓦などの材料費と瓦購入のための温泉津への旅費40円が書かれている。

(4) 大工やその他の職人

大工については、最初に「大正拾五年十一月 金拾円也四日分 大工安田支払 材木置場」、次いで「十一月廿日 金拾円也 博多大工新藤卯三郎へ渡ス」と記述がある。棟木墨書に書かれていた通り棟梁は博多大工の新藤卯三郎である。施主の前田長吉がかつて博多の川端町で雑穀商を営んでいた縁で博多大工に依頼したと考えられる。もう1人の大工安田は、棟上げに関する記述には棟梁へ白米3斗と50円を贈り安田へは米1俵を贈ったことが書かれており、安田は棟梁に次ぐ地位の大工と考えられるが、日役のページにも安田の名前が通算5日出てくることから、安田は新藤傘下の大工ではなく、地元の大工だと考えられる。他に新藤傘下の大工8名の名前がある。大工の賃金は1日3円が支払われており、総額2,295.77円となっている。それ以外に木挽き3名、左官4名の名も記されそれぞれ432.5円と63円が支払われている。日役には大工や木挽きへの支払いが重複して記述されており、それを差し引けば日役総額は259円となる。

(5) 上棟式祝儀

上棟式が行われた4月27日には、前述のように大工棟梁の新藤卯三郎には白米3斗と50円を贈り、安田氏へは米1俵、他の大工7人へは熟練度に応じてなのか2円～10円が贈られている。材木手配の世話をした細田へは米1俵と3円、木挽き3人には2円ずつ、トビ棟梁には法被と2円、他のトビ4人には1円ずつ、左官棟梁には10円、石屋には3円、そのほかの職人にも反物や現金が送られており、現金総額は127.5円となっている。

(6) 棟上御見舞

棟上げ時に近所の人々が労働力の提供を行う地域もあるが、建築帳にはそのことには触れられておらず、旧前田園で相互扶助的な労働力の提供があったのかは不明であるが、棟上御見舞として多くの人々から食料品が届けられている。近所や取引先等の41者から酒や寿司、パンや餅が届けられていることが「お茶上がり」に記録されている。酒5斗、餡餅100個、米1俵等と大量に贈っている人もいる。棟上げ時の写真にも多くの人が写っており、当時の賑やかな上棟式の様子が伝わってくる。

表3 棟上げまでの材料費と人件費

	費目	金額(円)	現在額(円)
材料費	材木	9,494.12	37,976,480
	瓦	200.00	800,000
	金物	1,369.82	5,479,280
	竹・縄	181.15	724,600
	石材	60.58	242,320
	雑費	1,133.52	4,534,080
	計	12,439.19	49,756,760
人件費	大工	2,295.77	9,183,080
	木挽	432.50	1,730,000
	左官	63.00	252,000
	日役	259.00	1,036,000
	計	3,050.27	12,201,080
合計		15,489.46	61,957,840
* 当時の1円=現在の4,000円と換算			



写真 2 中庭から写した大勢の人が集まっている上棟式の写真
(塩川氏写真提供)

表 4 棟上見舞の品

普請見舞いの品		該当数
現金	金一封	1
酒類	酒 1升	7
	酒 2升	3
	酒 1斗	3
	酒 2斗	4
	酒 5斗	1
	酒 1瓶	4
	酒 1瓶と2升	1
	ビール 半ダース	1
	ビール 1ダース半	1
米	玄米 1俵	3
	米 1俵	2
飯 パン 餅	赤飯	4
	パン 50個	1
	味御飯 3升	1
	すし飯 1升5合	1
	パン 100個	1
その他	アンの大餅 100個	1
	イカ 10杯	1
	柱時計1個	1

3. まとめ

前田園の町家建築は世話人の支援を受けつつ施主自らが材木や瓦をはじめ、土、竹、縄、砂などの建築資材の調達を行っている。大工や木挽き、左官などの職人の手配も施主自らがを行い、材料費も人件費も直接支払っている。棟上げまでに支払われた材料費や人件費及び交通費などの総額は 15,489.46 円（現在の 61,957,840 円）と高額になっている。材木は木挽き棟梁の世話により立木や丸太、製材品を地元直方市と近隣市町村で入手しているが、瓦は施主が島根県温泉津まで出向き購入している。大工は博多から呼び寄せている。最高の材料を求めて奔走し財を尽くして直営方式で建設したことがうかがえる。棟上げは大勢の人が普請見舞いを贈り、職人へは施主が御祝儀を出して賑やかに行われている。この様に施主が財と労力をかけて最高の材料で建築された町家は構造上も意匠上も質が高く、殿町の最盛期の賑わいを伝える貴重な町家である。

この研究には旧前田園の現所有者の塩川直登氏や直方市教育委員会の田村氏から資料の提供をいただいた。協力に感謝申し上げます。

【参考文献】

直方市「直方伝統的建造物群保存対策調査報告書」、2012 年

（ 発 表 論 文 ）

大森洋子、「大正末期の直営による町家建設に関する研究」、2026 年度日本建築学会大会学術講演会研究発表梗概 投稿中